東京都三多摩公立博物館協議会報

ミュージアム多摩

No.21

発　行
2000年3月31日

三博協新加入「パルテノン多摩歴史ミュージアム」リニューアルオープン

パルテノン多摩は、ホールと博物館からなる複合文化施設で、多摩ニュータウンおよび多摩センター地区の早期成熟化・活性化を促進するための文化的な拠点として、1987（昭和62）年に開館しました。多摩市が100％出資して設立された財団法人により運営されています。

昭和50年代より多摩市立郷土資料館と市民センターとして別々に進められていた構想が、計画途上でドッキングすることになったため、両者の機能を複合する形で、一つの建物の中に併設されたことに最大の特徴があります。

博物館系施設としては、開館以来「常設展示室」という名称で「多摩の自然とくらし」をテーマにした展示をおこなってきました。しかし、開館後10年以上を経て、機器の老朽化が深刻な問題となり、展示内容の新鮮味も薄れてきたため、このたび、テーマも一新してリニューアルすることになり、2000（平成12）年3月15日にオープンしました。博物館として広く認知されるように、名称も、かつての「常設展示室」から「歴史ミュージアム」に変えました。

今回のリニューアルにあたっては、展示テーマを「多摩丘陵の開発」として、構成や内容も思いきってこのテーマに絞り込みました。なかでも多摩ニュータウン開発の経緯を重点的に取り上げ、いわゆる近現代史の部分に全体の4分の3のスペースを割きました。

多摩市域の6割を占める多摩ニュータウンは、日本有数の大規模住宅開発プロジェクトであり、多摩市域を中心とする南多摩地域の歴史にとってもきわめて重要な意味を持っています。また、パルテノン多摩という施設自体が、多摩ニュータウンの中心部に位置しているという立地条件も考慮して、今回のリニューアルでは、多摩ニュータウンを前面に押し出した形で構成しました。多摩ニュータウン開発を中心とする身近な歴史を学ぶ場として、これからますます充実させていきたいと考えています。

西暦2000年を迎え　三多摩公立博物館協議会の草創期を想う

元府中市立郷土館長　朝　倉　雅　彦

はじめに　いよいよ西暦2000年の幕が開きました。ミレニアムという言葉も目に付きます。この大きな節目に、生れ合わせたことは、何より、幸せなことであります。歴史が命の博物館にとりましては、絶好の温故知新の機会と言えます。

私は、昭和46～61年度に亘って、府中市の博物館に勤務し、「府中市郷土の森」の建設に従事しました。この間、この協議会（以下三博協）の創設にも携わりました。当時の私には、館務も三博協も全く一体に思えました。明日の夢を見ながらのハリのある時代でした。

今、この原稿のご依頼を受け、この頃の血潮が滾(たぎ)って来るのを禁じ得ません。

三博協草創の頃　昭和40年代は、三博協の揺籃の時代でありました。はじめの頃、多摩の博物館は、東村山、八王子、府中の3館で、後半に、町田、青梅、調布の3館が加わり、6館となりました。

それまで、館同志の個別の交流はありましたが、館数も増えて来たので、組織的な活動を行おうと八王子の小泉恵一館長さんの肝入りで、昭和49年8月16日に、八王子の郷土資料館で、「多摩公立博物館長会」が誕生しました。小泉館長さん心尽しのビールで乾杯した時の感激は、昨日のことのように、はっきり覚えております。

この時は、規則倒れにならないようにといくつかの申し合せで出発しました。館長だけでなく全職員の会とする。会は隔月に各館の持ち廻りで開く。事業は情報交換や資料の相互貸借、国や都への博物館振興補助金の要望などでした。この集りは、着実に実施され、なかなか楽しく夢のある集いでした。

昭和51年の暮には、6館の忘年会が、八王子で催されました。皆さんは、「三多摩博物館壮士の集い」とか言って、まことに意気軒昂たるものがありました。

この館長会が発足する少し前の5月24日には、6館の職員の皆さんの熱意により、「多摩公立博物館職員連絡会」が誕生し、第1回の研究会が、「地域社会と博物館活動」をテーマに開かれました。この会は、館長会の発足により、発展的に解散しました。当時の盛り上りを物語る一つであります。

館長会も順調に成長し、瑞穂、奥多摩、福生それに農工大、都立高尾と館数も増えて来ましたので、いよいよこの11館で組織化することになりました。昭和53年7月15日に、町田の博物館で、「東京都三多摩公立博物館協議会」、今日の三博協が結成されました。この時の興奮も忘れてはおりません。この会になって、現行の会則の制定、会長制、会費制、機関紙の発行が定められ、初代会長に満場一致で小泉館長さんが選ばれました。

会員の絆である機関紙「ミュージアム　多摩」は、当時の町田の川松さん、調布の近藤さん、八王子の佐藤さん、府中の横尾さんのご尽力により、昭和54年12月1日に創刊されました。この号が第21号と伺い今昔の感に堪えません。

ここで、三博協の歩みを振り返って見ますと昭和40年のはじめの頃、3館で職員15名、館長会発足時6館25名、三博協結成時11館69名、それから22年経った今日25館190名で、着実な発展は、嬉しく、心強い限りであります。

一方、昭和49年に発足しました館長会の館長6名のうち、三博協生みの親の小泉さん、調布の狩野さん、町田の千種さん、青梅の稲葉さんは、他界されました。東村山の小山さんと私は健在です。あの頃、ふた月ごとに、お互いに元気で、楽しくお逢いしていたのにと感無量のものがあります。

三博協とは　多摩地区は都心と山間部のはざまにあって、太古からの風土の中へ、断えず新しい酵母を仕込み“多摩”という芳醇な銘酒をじっくりと吟醸している全国でも稀れに恵まれた博物館の環境条件のところです。

私には、この多摩地区が、一つの壮大な生きた博物館に見えてなりません。この核にあるのが、三博協と思っております。

21世紀に懸ける夢　世の流れを眺めておりますと、“先人の魂と英知の宝庫であり、世の良識の府である博物館”の重さを痛感します。三博協草創の頃の夢は、今日、ますます拡がるばかりです。そこで、2000年に相応しいでっかい夢を見てよいのではないでしょうか。

“21世紀は、博物館の世紀”

“21世紀の博物館は、三博協から”と。

皆様方の限りないご活躍をお祈り申し上げます。

私的「ミュージアム多摩」創刊のころ

八王子市教育委員会社会教育課　佐　藤　　広

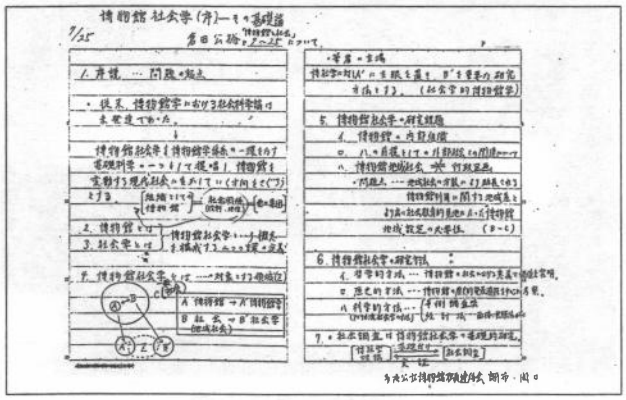
はじめに　私が八王子市郷土資料館で働きはじめたのは1973（昭和48）年7月のこと。2000年を迎えて、だいぶ過去のことになるが「ミュージアム多摩」創刊のころを私的に振り返ってみたい。

まだ学生気分そのままで、仕事への不安と、役所に途中で入っての勤務先が出先、遺跡発掘の全盛期で考古学専攻でない学芸員になにができるのかといわれ、何をどうしていいのか分からず大いに悩んだ。でも根気よく学芸員としての指導をしていただいた先輩学芸員の齋藤経生さん（女子美術大学教授）や、多くの刺激をくださった小泉館長をはじめとする職員の方々には感謝している。

仕事をやめたいと思いつつも仲間がいる、何かやりがいのある仕事かなと気づいてきたり、ありのままの自分で仕事をすればいいと思えるようになったのがちょうど「ミュージアム多摩」創刊のころのことであった。仕事に就いてから5～6年目ころのことである。

スタートとしての学芸員の学習会　昭和49年2月20日と3月5日に、東京都社会教育施設職員研修会が東京都教育会館で行われた。そのとき当時の町田市郷土資料館（町田市立博物館）の畠山豊氏と河野実氏から三多摩の博物館で定期的に会合を持つようにしようと話を持ちかけられた。そして3月5日の研修の帰りに打ち合わせをし、3月末に調整をして5月から会合を持ち、6月からは博物館学研究会編「博物館と社会」をテキストに毎月みな仕事を終えてから夜間に集まって学習会を開いた。

名称は「多摩博物館職員連絡会」「多摩公立博物館職員連絡会」「多摩市町村立博物館職員連絡会」と短期間のうちに変化した。これも、若くして職場では地位もない各博物館全体の会にしようという私たちの理想と現実の大きなギャップの結果であった。



関口さんのレジュメ（1974.7.25）

会のメンバーは東村山市立博物館の田中雅信、府中市郷土館の横尾友一・松本啓子、町田市郷土資料館の河野実・川松康人・畠山豊、青梅市郷土資料館の大河内啓子、調布市郷土博物館の関口宣明（敬称略）、八王子市郷土資料館の私のわずか9名の10ヶ月に渡る会であった。いまでもとても印象的な時であり貴重な人たちと出会った。

館長会の結成から三博協へ　昭和49年8月16日に、当時の八王子市郷土資料館長小泉恵一氏の呼びかけで、八王子市・府中市・青梅市・町田市・調布市・東村山市の6館の館長会が結成された。この館長会の結成が、学芸員の学習グループ終焉の一つの要因にもなった。館長会の主催で同年12月20日に町田市郷土資料館において、加藤有次國學院大學助教授の講演会を開催し、多くの職員が参加した。

この会が全体的なものになるかと期待され、そうしたことも館長会の目的の一つであったが、館長会のままで4年が経過した。

私の手元に当時の資料はほとんどないが、この原稿を書くために書棚を探したら、東京都市町立博物館協議会編『多摩の公立博物館』をみつけた。14頁のもので、『東京の博物館』の各館紹介をコピーして転載し、それに各館の職員名簿を付けたものである。その職員名簿には個人の住所・電話番号・出身地・趣味まで書かれている。名簿を眺めているとどの館の館長さん、庶務担当の方、学芸員、みなの顔を思い出す。合同の新年会などもやり、緊密なつき合いであった。

昭和53年5月10日に、東京都三多摩公立博物館連絡協議会が発足した。奥多摩・福生・瑞穂が加わり合計9館となった。そして、予算捻出の努力を経て、昭和54年12月1日にB4判2つ折り8頁の「東京都三多摩公立博物館協議会報　ミュージアム多摩」を創刊した。確か初期には町田・府中・調布・八王子から各1名の編集員が出て編集にあった。「ミュージアム多摩」という名称は町田市の川松さんの提案のように

記憶している。

議論を重ね限られた紙面を工夫して編集に当たったが、私的には何より他の博物館の方から様々な情報を得られ、共に仕事ができて楽しい機会であった。府中市でよく編集会議を開いたが、ある寒い日に館長の朝倉さんがワンカップのお酒を振る舞ってくれたような気がしている。今では考えられないことだが。

民具研究へ－背負子の会－　学芸員の学習グループの中から、民俗学関係の研究グループが誕生した。昭和49年8月12日、町田市郷土資料館の畠山豊氏の提案で、当時文部省史料館に勤務されていた中村たかを先生（国立民族学博物館名誉教授）を講師に迎えて、渋谷区の神宮前区民会館で先生が編纂した『現代のエスプリ－民具－』の合評会を行った。印象に残っているのは、著名な民俗学者の裏話である。

その会がきっかけとなって、文部省史料館所蔵の民具調査、日本常民文化研究所主催の民具研究講座、奈良県立民俗博物館の見学、青梅市や檜原村における背負梯子の調査など民具や民俗研究の世界へと入っていく。日本の民具研究の高まりと相まって、日本民具学会の設立にも関与する。中村先生はじめ、文化庁の木下忠先生（愛知大学教授）、お亡くなりになった日本常民文化研究所（神奈川大学教授）の河岡武春先生などからご指導いただいた。

この会のメンバーは町田市の畠山豊、青梅市の大河内啓子、調布市の関口宣明、府中市の松本啓子、八王子市の私、多摩地域外ではあるが学芸員としては大先輩の川崎市立日本民家園の小坂広志（敬称略）が加わっての6名の会で、昭和49年から53年ころまでの約5年間の活動であった。各博物館の学芸員が連携した民具研究グループでは、日本で初めての会であった。

私はこの「背負子の会」のお陰で民俗学や民具研究の世界に足を踏み入れ、自分なりに研究テーマを持つことができた。

おわりに　私が郷土資料館で働き始めたころは、郷土史家や市内の有力者が中心となって展示を企画し、実際の展示作業やパンフレットの原稿執筆から展示パネルの作成まで手作りで行っていた。今ではごく当たり前の体制であるが、次第に学芸員が中心となって催し物を企画実施するようになった。

そのような状況の中で、町田市立博物館が開館したことはとても刺激的であった。もちろん他の館の個性的で活発な活動も意識しながら仕事をした。博物館群としての意味を実感しながら。

職場では郷土資料館だより、研究紀要、常設展示解説書、年報の発行、体験学習などをみんなで苦労して実現させた。時代とはいえ初めてつくりあげる仕事を幾つもできたことは、幸運であったかも知れない。

さて、ＮＰＯなど再び博物館活動が市民の手になるかも知れない昨今、新しい将来を展望した社会性のある仕事をしたいと考えている。その場が博物館でなくても、原点は八王子市郷土資料館と多摩の博物館の仲間から学んだことである。「ミュージアム多摩」創刊のころが私自身の仕事の原点である。

人はそれほど違った環境にいるわけではない。いかに日々出会ったことに正面から真摯に取り組むかだと思う。向き合えばヒトもモノもコトも、そして自分も見えてくる、と思っている。

（八王子市社会教育課）

多摩の公立博物館（1976.3）

小泉館長退職の日
（八王子市郷土資料館　1993.3）

「赤羽刀」の返還

福生市郷土資料室

太平洋戦争直後に数十万本といわれる日本刀が、連合国軍総司令部（GHQ）により没収されました。「昭和の刀狩り」といわれます。これら接収された刀剣類は米第八軍赤羽兵器補給廠（現在の北区赤羽）に収められたことから、「赤羽刀」と呼ばれ、保管されていました。

「赤羽刀」の多くは海中投棄などで処分されましたが、昭和22年に約5500本が日本側に返還され、その内1132本が昭和30年代までに旧所有者に返還されました。しかしその後は返還されることもなく、東京国立博物館内で眠り続けていました。

平成7年、「接収刀剣類の処理に関する法律」が成立し、翌年2月1日から施行されました。この法律により、4576本の刀剣類が国に帰属することとなり、内3209本が「赤羽刀」の公開・活用を目的として、全国の公立博物館・美術館に無償譲与されることとなったのは、ご承知のことと思います。

室町時代から戦国時代にかけて現在の福生市域は後北条氏の支配下にあり、文化的・経済的に大きな影響を受けていたと考えられます。

このことから当資料室では、平成10年度に特別展示『武州下原刀展』を開催し、当時の文化を伝える郷土資料である下原刀及び関連資料約100点の展示を行いました。下原刀とは、後北条氏が庇護した山本姓を名乗る刀工群が室町時代から江戸時代にかけて、現在の八王子市恩方・元八王子地区で製作した刀剣類の通称です。

この実績が評価され、今回文化庁から97口の刀剣類が譲与されることとなったのです。内訳は下原刀38口、その他参考となる武蔵国で製作された刀剣類59口です。これらの資料は今後研磨を行い、展示を通じて公開していきたいと思います。郷土刀である下原刀が語る地域の歴史とともに、日本刀が伝える歴史と日本人の美意識、また赤羽刀の歴史について未来に伝えていきたいと考えています。

特別展「くにたちを愛した山口瞳」の開催

くにたち郷土文化館

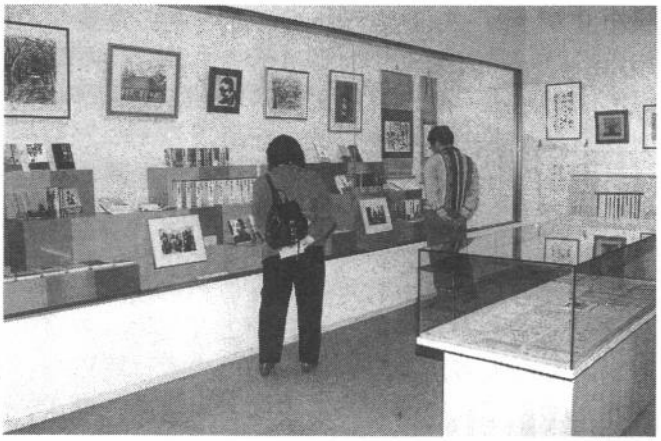
平成11年度特別展として開催した「くにたちを愛した山口瞳」は（会期／1999.10.31～2000.1.16）、市民を中心とした実施委員会と共同で主催するという方式をとって行った。実施委員会は22名の委員で構成され、当館が事務局となり、準備にあたった。

この特別展は、国立を舞台にした作品をいくつも書き、国立の名を全国区にした、作家山口氏の功績を、縁の深い国立市で展示として取り上げてはどうかという、市民からの提案を受けて開催されることとなった。開催にあたって、実施委員には、展示図録編集担当、展示担当、イベント担当など分担して取り組んでいただいた。市民の方が具体的な準備に関わったことで、幅広い層の方々にご協力いただけた。

こうした形態での取り組みは初めてであったうえ、組織づくりなどに時間を要したため、実質的な展示準備期間が短くなるなど、事務局としていろいろな問題を抱えることとなった。また、さまざまな事項について、実施委員会において決定・実行せねばならず、その分時間がかかったり、実施委員会の判断を優先しなければならないなど、通常の展示準備とは異なる問題に対処せねばならなかったことも事実である。

だが、館職員だけで企画したのではなかったため、思わぬ意見が出たり、日ごろのやり方とは違う手法が提案されるなかで、館側が学ぶ点は多かった。多くの展示資料が集まったのも、実施委員会があったからといえる。

こうした形態での展示を行う機会は、あまりないであろうが、館として貴重な経験を積むことができた。この経験を今後の事業に活かしてゆければと考えている。



『わが郷土博物館から楽器の音色が聞こえる』

東大和市立郷土博物館

博物館は資料を収集、保管、展示することを主たる目的とするものと思われていた。昨今、参加型の博物館が叫ばれてから久しいが、初の試みで博物館の閉館後にエントランスホールの有効活用の一環として、ミニコンサートを開催することとなった。

演奏者にとってみては設備的に気の毒に思えるが、演奏する場を提供するということと、練習の発表の場としての両者の企画が一致し、平成９年度から音大生により年２回の金管楽器などによる演奏会を行って好評を博している。

演奏会場でもないのに、博物館で、と目くじらを立てるお方もあろうかと思うが、これすべて、生涯学習の場としての役割と冷静に受け止めていただければ、納得がいくのである。

市民による、市民のための郷土の博物館としては、最高のお膳立として考えている。

寂しい感があるが、博物館の存在を認識していただく絶好の機会なのである。

すでにこの種の催しを実行されている他館もあると思われるが、当館においては、画期的な出来事であった。

この原稿が読まれる時には、すでにハンドベルによるコンサートが多くの聴衆をまえに成功裏のうちに幕を閉じていることと思う。

江戸東京たてもの園の事業

江戸東京たてもの園

入館者数の動向についてはたてもの園においても重要な問題であり、リピーターの安定化や新規の来園者の開拓は常に考えなければならない課題です。幸いなことに立地条件柄、小金井公園には桜の季節になると花見の方々で賑わうことから、毎年この時期に合わせて特別展を開催することによって、たてもの園での活動を知っていただけるようにと考えています。

そこで、今年度は現在多摩を横貫する２本の幹線道路として、甲州街道と青梅街道を中心に取り上げる展示を予定しています。今では中央線を挟み新宿・東京方面への、北と南の重要な物資の輸送路となっている道路ですが、江戸時代には、近隣の村々の生活道路としての利用はもちろんですが、甲州街道は五街道の一つとして江戸甲府とを繋ぎ諏訪まで延びる大動脈でした。片や青梅街道は石灰の輸送を目的とされ開設され、御岳山への参詣路として賑わうなど、利用の仕方も区々でした。これらから江戸時代の多摩地域を走る街道ではどのような物が運ばれ、どんな人々が通行していったのか、両路の違いについて、宿場のあり方なども含めて考えていきます。開催期間は2000年３月28日から５月７日を予定しています。

特別展以外にも、例年行っているワークショップや、地域の催しに合わせてたてもの園での活動を周知していくなどをしていきたいと思っています。また、１月末には和傘問屋を営んでいた建物が１棟復元され、復元建造物は合計27棟になり、街並みらしくなってきたことなどもＰＲしていきたいと思います。

開館２５周年の節目を迎えて

調布市郷土博物館

当館は昭和49年11月に開館し、早いもので四半世紀が経過した。しかし予算厳しき折り、各施設の周年事業は自粛ということで当館でも25周年記念事業は一切実施しなかった。

さてこの25年、職員の立場からすれば毎日の積み重ねで過ぎてしまったようにも思えるが、入館者の中心である子供達に接していると、25年の隔たりを感じることが屢々ある。かつては展示説明で「近くの畑で使っているのを見たことないか」と問い掛ければ、それなりの答えが返ってきた。しかし今の子供達に同じ話をしても、ほとんど無反応に近い状態である。また以前はよく土器片などを持参し、調べてほしいという子供が来たが、ここ何年もそうした子供も現れていない。市域の変貌ぶりなど子供達を取り巻く現況を考えれば「近所の畑で・・・」というフレーズが通用しないのも無理からぬことである。

またかつては館内で騒いだり走り回ったりする子供、構内の木に登る子供など、大声で注意することもあった。裏返せば博物館は子供達の遊び場の要素もあったのだろうが、今はそのようなことも少なく、宿題の調べ物や館内にあるパソコンのクイズを一頻りやって帰っていく。博物館にとってはこれが本来の姿なのかもしれないが、反面では何か寂しい気持ちもする。

四半世紀といえばほぼ一世代、開館当時の子供達の二世が今来館している勘定になる。子供達の反応の違いは当然、むしろこちらの対応が遅れているのだろうと自戒している。今後、学校では週五日制の導入や総合科の設置などが予定されており、博物館と子供達との繋がりは直接間接に一層強まるものと思われる。この25周年を節目に、子供達がより魅力を感じる博物館にできればと考えている。

平成11年度の活動状況

小金井市文化財センター

季節展：「名勝小金井桜」（４月３日～５月５日）。江戸東京近郊の花見の名所小金井に関係する資料（錦絵・絵葉書・写真等）を展示するもので、展示構成を少しずつ変えながら第６回目を数える。来年度の展示では、歴史的環境保全地域に指定された玉川上水に関する概説的なコーナーも予定している。

企画展：「竹の民具」（11月３日～12月23日）収蔵品を紹介する企画、カゴ・ザル等竹製の民具約100点を展示した。また、かつて市内でも盛んであった竹細工の伝統技術を写真で紹介した。収蔵品展については、新たなテーマを設定し、今後も実施していきたい。

講演会：「史料に見る平安時代の武蔵国」（12月の土曜日３回連続）。古代の史料を読み解きながら、律令制度や武蔵国について学習した。大学レベルの講演会は、毎回好評であり、今後も継続していきたい。

講　座：「古文書講座入門編」（２～３月の土曜日６回連続）。今年度から新たに実施することになった。市内に残る江戸時代古文書をテキストとし、初心者を対象とした入門講座。地域史に対する関心を深めるとともに、将来の市史編纂に理解と協力を得られる市民を育てることを目標とする。

このところ入館者が減少している。利用者増への取り組みとしては、常設展の展示替えや、新たな事業への取り組み等が必要と考えるが、現状は厳しく、今は創意と工夫による手作り企画で乗り切るしかないだろう。

「総合的な学習」への対応の現状と課題

東京都高尾自然科学博物館

平成14年に学校週5日制とともに新学習指導要領が施行され、新たに「総合的な学習」が導入される。当博物館では10年度から「総合的な学習」への対応について取り組みを始め、11年3月には八王子市立小学校長会で博物館の活用方法を紹介させていただいた。

各学校でも「総合的な学習」の導入に向けた取り組みが活発になってきたこともあって問い合わせ等が増え、11年度は従来から行ってきた学習支援に加え、学校と博物館が連携したいくつかの試みを行った。

博物館や博物館周辺の自然環境を活用した学芸員の指導による授業、学校周辺の自然観察を目的とした学芸員による授業・講義、理科教員を対象にした観察指導を主な内容とする博物館及び周辺での実地研修会などである。

これらの試みから、子どもを対象とする場合に特に事前調整が重要であることを認識した。これをいかに充実させるかが当面の課題である。

子どもたちには、学芸員の話を聞いたり野外観察の指導を受けるだけでもそれなりに面白さや楽しさを感じてもらえると思うが、事前調整のやり方次第で効果が大きく左右される。

事前調整とは、年間の授業計画の中の位置づけや、何をねらいとした授業なのかを明らかにし、その上で当日の授業の具体的な内容を教員と学芸員が事前に調整し固めていく作業である。

特に、学校周辺で野外観察を行う場合は、怪我などの事故を未然に防ぎ、当日の学習効果を上げるための準備について学芸員と教員が一緒に現場を下見することが欠かせない。

我々もまだノウハウの蓄積が十分でなく、教員も博物館の活用方法がよく分からないという状況である。したがって、当面は教員を対象に博物館の活用方法などの情報提供に力を入れ、近隣の館園とも連携しながら、支援体制を整備していきたいと考えている。

空調設備改修工事に暮れる

羽村市郷土博物館

4月、市の組織改革、人事異動により、館長以下全職員が総入れ替えとなり、文化財保護行政の所管、係長職の欠員という、厳しい状況により平成11年度がスタートした。今年度一番の大事業は、企画展や講座といったものではなく、空調設備の大規模改修工事であった。異動早々、まだ館務に慣れる間もなく設計が始まり、秋口に工事着工、なんとか冬の入り口で暖房も使えるようになった。この工事の影響で、団体見学の入館規制はおろか、当初予定していた特別展の企画も延期せざるをえないこととなった。また、重要有形民俗文化財旧下田家住宅の屋根葺き替え工事も夏前に実施しており、工事付いた1年であった。

新規収蔵資料で特筆すべきは、国から譲与を受けた接収刀剣類である。刀、脇差合わせて5本を譲り受けた。詳しい整理・調査はこれからだが、館活動の新たな方向を期待できる資料である。

現在、当館では「ボランティア」について調査研究を始めようと考えています。一口に「ボランティア」といっても、様々な問題が山積みしていることは先学のとおり※ですが、昨年のテーマとなった「博物館の連携」という視点からも、広域的に見解を深め、賛否どの方向へ進むべきか、この紙面が少しでも議論の場として機能できればと考えています。是非ご意見をお聞かせいただければと思います。

※　「江戸東京博物館ボランティア導入に関する調査」
平成9年3月　財団法人東京都歴史文化財団
「第46回　全国博物館大会報告書－平成10年度」
平成11年3月　財団法人日本博物館協会
他

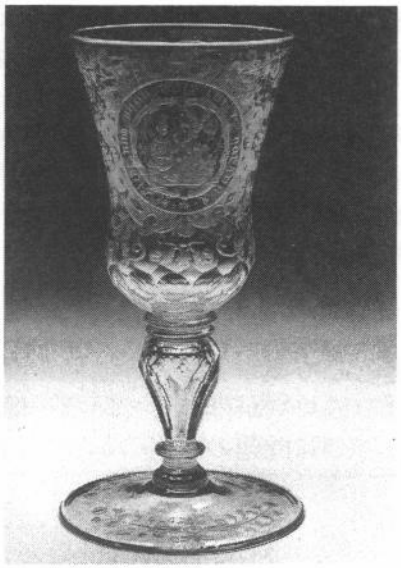
町田市立博物館所蔵のガラスについて

町田市立博物館

町田市立博物館では、17年前の1982年9月に「チェコスロバキアのガラス」展を開催し、18～20世紀までの作品84種215点を展示しました。これらのガラスは個人コレクションによるもので、展覧会終了後博物館へ売却してもよいとの話しになり、市長の判断で一括購入することになりました。これが当館におけるガラスコレクションのきっかけになった訳です。

しかしこのコレクションだけでは、ボヘミアン・グラスの全体を見るには不十分でした。そこで当分の間は予算的な問題もあり、ボヘミアン・グラスだけを補充していくかたちで、購入を進めていくことになりました。次に1987～88年度にかけて、中国ガラス449種460点及びフランスのアール・ヌーヴォー、アール・デコのガラスなどを購入しました。中国ガラスは18～20世紀でボヘミアン・グラスと同年代であり、西のボヘミアン・グラスに対して、東の中国ガラスと言うことで、東西のガラスを所蔵することができました。ここに二つのガラスコレクションの核が出来上がった訳です。

町田市立博物館では、上記のようにボヘミアと中国のガラスを中心にすえて、コレクションの幅を広げていくことになりました。まずヨーロッパのガラスでは、ボヘミアン・グラスの成立と関係の深いヴェネツィアン・グラスや、カット・グラスを世界に広めたイギリスやアイルランドのガラスなどをはじめ、隣国のオーストリアのガラス、オランダのファゾン・ド・ヴェニーズ（ヴェネツィア風ガラス）や、イスラムやヴェネツィアの影響下で作られたスペインのガラスなどを増やしてきました。また地中海沿岸より出土した古代ガラスであるコア・グラスやミルフィオリ・グラス、それに江戸時代のガラスなどがコレクションに加わり、現在659種825点を数えるに至りました。



企画展『青梅の名所図』

青梅市郷土博物館

当博物館では、平成11年度の企画展『青梅の名所図』を8月3日から11月14日まで開催した。

この企画展は幕末から明治時代に発刊された武蔵御嶽神社や金剛寺、天寧寺の境内図をはじめ、大正時代に発刊された名所図など青梅市内の寺社や名所を描いた絵図を中心に展示し、その特徴や変遷を紹介した。

また、同時期に発行された全国的な観光地である草津、日光、善光寺、熱海、吉野、道後温泉などの絵図も合わせて展示、来館者に当時の旅行気分を味わっていただいた。

江戸時代に入ると農業のほか商業も盛んになり、生産物の流通の円滑化、宿駅の整備などにより、経済も発展し、人々の生活には余暇が生じたことから、寺社参詣を兼ねての旅行が盛んに行われるようになった。

青梅市域の近世後期の文書の中にも残る多くの道中記や旅日記、また今回展示した諸国の名勝、寺社境内の一枚刷りの絵図などからも、当時多くの人々が各地へ出かけたことが伺われる。

本展開催期間中におこなわれた解説講座には、多くの方々が受講され、展示資料についての詳しい説明をうけ、幕末から大正期における青梅市域の名所図の特徴やその変遷などについて学んだ。

展示解説講座（11月7日実施）

『多摩と江戸－鷹場・新田・街道・上水－』の刊行

たましん地域文化財団

当財団では多摩地域の歴史・考古・地理・民俗・自然など様々な分野をとりあげる季刊誌『多摩のあゆみ』の他、多摩地域の調査・研究成果の図書出版事業を行っていますが、平成11年度刊行の図書は『多摩と江戸－鷹場・新田・街道・上水－』です。

大石学氏（東京学芸大学助教授）ら7名が、平成9年に三鷹市で行った江戸時代の歴史講座、そのメンバーを含む20～40代の若手研究者13名による共同執筆。タイトルにある「鷹場制度」「新田開発」「街道」「上水」を含む、最新の研究成果をふまえた23におよぶエピソードを、時系列に江戸前期・中期・後期の3つに分け、「多摩の江戸時代史」をわかりやすく理解できる入門書になっています。

本書は二つの視覚からまとめられています。

第一は明治以降の首都東京と首都圏多摩の前提として多摩と江戸の発展を捉えるというもの。今日の東京が直面している一極集中や生活環境などの諸問題の発生の起点を明治維新でなく江戸幕府成立に置き、都市江戸の成長を首都機能の蓄積・強化の過程、多摩の江戸時代の展開をこれを直接に支える首都圏の形成過程として捉えています。

第二は多摩の江戸時代史を江戸との均質化、等質化の過程として捉えるというもの。多摩の独自性や都心部との異質性に重点を置いてきたように思われる従来の多摩論・多摩研究に対照的な見方を提示するものです。

A5判・320頁・定価2,500円、けやき出版から発売中です。

清瀬の写真集を発刊

清瀬市郷土博物館

今年度4月に写真集「清瀬の365日」を発刊した。作者は童画家・写真家として60年以上活躍している熊谷元一氏である。熊谷氏が縁あって清瀬に住みはじめたのは今からおよそ30年前。それまでは主に故郷の長野県阿智村で活動してきた。人々の暮らしに焦点をあてた根気強い仕事が高い評価を受けており、日本を代表するアマチュア写真家の一人である。

この写真集は、熊谷氏が昭和60年の元旦から62年9月27日までの千日間に亘り、清瀬の市民生活を撮り続けた作品をまとめたものである。当館の建設準備委員だった氏は、開館後に企画展示できるようにと撮影を開始、毎日市内を巡って納めた写真の総数は2万点以上になった。展覧会では約1000点を紹介、訪れた市民は膨大な作品数と写真家の観察力に驚嘆した。

それから10年以上の歳月を隔てて写真集として刊行することになったのであるが、期限と予算とをにらめっこしながらの編集作業となった。千日間を時系列で掲載することも考えたが頁数の都合で清瀬の一年間の出来事を追う形にした。本文はモノクロなので元のカラー作品の美しさを出せないこともあり、モノクロになっても映える写真を選定した。作品をメインにしたかったのであまり細かいデータを掲載しなかった。

果たしてこれでよかったのか？と出来上がった直後にも次々と不満や後悔が湧いてくる。館としては寄贈していただいた写真の整理と調査を続け資料としての価値を高めることにより、先生に不行届きをお詫びしたい。

これらの写真はごく平凡な町の平凡な風景ばかりだ。しかしながら、人目をひかない風景だからこそ記録に残りにくい。昭和最後の一郊外都市を集中的に記録した作品として、時が経過するにつれてこの仕事の重要性が見えてくると思う。

今年度の活動から
～夏休み歴史教室について～

あきる野市五日市郷土館

五日市郷土館では、市民の方を対象に、地域の歴史・民俗・自然などについての理解を深めてもらうことを目的に、講座や見学会を開催しています。

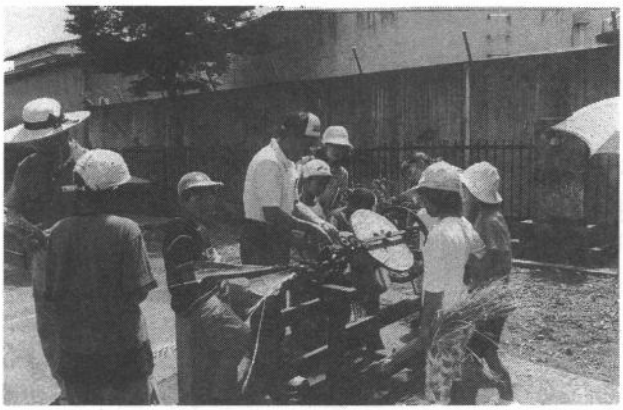
そのなかから、８月に開催した「夏休み歴史教室～昔の生活を体験しよう～」について紹介したいと思います。

「夏休み歴史教室」は、昔の人々の暮らしやどのような工夫をして生活をしてきたかを体験学習を通して学んでもらうことを目的に、市内の小学生と保護者を対象に開催しました。

内容は、昔の人々の暮らしの話と縄ないの体験（手で藁をなう、縄ない機を使って縄をなう）、麦の脱穀と選別の体験（千歯こき、足踏み脱穀機、麦臼、唐箕などを使用）を行いました。

参加者は、初めて、これらの民具を使う方がほとんどで民具の仕組みや働きに大変驚いていました。また、昔の人々の生活の大変さや生活の工夫に感心をしていました。参加者のこのような感想から、館の収蔵資料の展示に止まらず民具を使っての体験学習の機会をより多くしていくことも館の役割だと改めて感じました。

最後に、当館の常設展示の一つの特徴として、民俗関係の資料は、触れる展示・動かして学べる展示としていることがあげられます。今回の夏休み歴史教室も、館の特徴を生かした主催事業の一つです。今後も、この特徴を生かした体験学習を中心とした歴史教室を継続して開催していきたいと考えています。



「新収蔵品展」を終えて

日野市ふるさと博物館

平成11年度企画展は、前半を「貝は語る　日野の自然とくらし」、後半を「江戸文化の粋　ー絵図・版本を中心にした井上恒正コレクションの世界ー」をテーマに行った。両展示は、いずれもコレクションの寄贈を請けて、その公開を目的とした「新収蔵品展」であった。

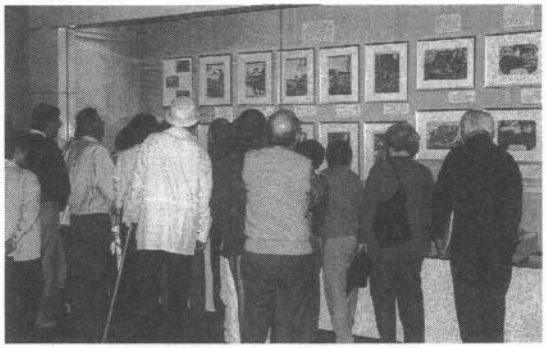
ここでは後半の「江戸文化の粋」による新たな展開を紹介する。

「井上恒正コレクション」は杉並区の井上氏から寄贈された1000点余の資料の総称で、道中記や絵図類を中心に、地方文書・地誌類・文学作品・美術工芸品に及び、当館の既存の収集分野である自然・民俗・地方文書を大きく越えるとともに、宿場として発展してきた市域にとっては、「先触」など宿場側にはない資料も含まれており、願ってもない資料群であった。

新収蔵品は、早速11年度の後半の展示を受け持つことになったが、これに先立つ目録の作成は、資料点数の多さと美術工芸品を含む多様さのため仮目録（資料カード）の作成に止まらざるを得なかった。正規の目録作成には各分野の専門家の協力を仰がざるを得ないし、仮目録といえども、決して容易な作業ではない。

そこで古文書の調査・解読、さらに公民館で講座を持つなど地域史の指導的な役割を果たしている「日野の古文書を読む会」の協力を得て、資料カードの作成を短期間に終わらせ、展示の構成や資料の選択を容易にすることが出来た。

今回の「新収蔵品展」は、新しい分野の収蔵品目録をいかに作成するかという大きな課題を残したと同時に、地域史研究グループの力を展示のために生かせたことと、そのグループのレベルの高さを改めて認識した展示であった。



企画展「江戸文化の粋」展示風景と観覧中の「日野の古文書を読む会」の皆さん

「かやぶき民家園の休園について」

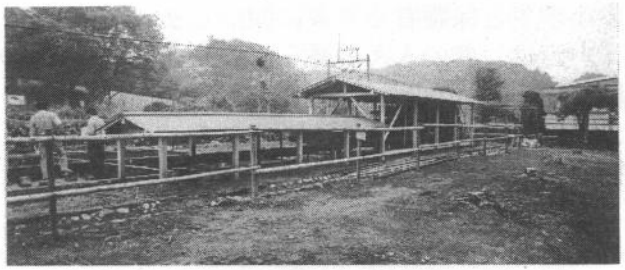
東村山ふるさと歴史館

昭和59年の開園より、「かやぶき民家園」として広く親しまれて参りました当市指定有形民俗文化財「旧武藤家住宅主屋」は、テレビや新聞にて報道されております通り、平成11年6月11日未明放火され、全焼してしまいました。11月末に犯人は捕まったものの、江戸時代後期から末期に完成した整形四ツ間取りの建築物は、市内にすでに現存しておらず、重要な遺産を失った重みを感ぜずにはいられません。

火災発生が確認されたのは、6月11日午前1時55分、懸命な消防活動を行なったものの、火のまわりが早く、同3時48分鎮火したときには、建物全焼、園内に生活復元資料として展示していた民俗資料（約210点）の焼失、隣接する土蔵を模した倉庫の外壁や雨樋の損傷、公園管理事務所屋根の一部および雨樋の損傷、公園灯一基の損傷に至ってしまいました。

今後の対応策については現在検討中で、事業等については、しめ縄づくりの体験事業以外は休止し、年中行事等のお飾りもふるさと歴史館のみにて行なうこととしております。

多摩地域にも民家を移築復元し、事業活用されている館が増えてきた中、どのような施設で、どのような事業展開をしていくか、大きな課題となっております。お問い合わせや視察させていただきに、お伺いすることもあろうかと思いますが、ご指導いただきたくよろしくお願い申し上げます。



現在のようす（小屋は焼失木材の保存用）

水の大切さ水源地の役割を再発見

奥多摩水と緑のふれあい館

当館は、奥多摩の豊かな自然や水源林の役割ダムの仕組みと役割、水の大切さを特殊な映像表現により紹介すると共に、奥多摩町の郷土資料展示による、歴史・文化・民俗を紹介し、都の水源地である奥多摩町と、水道を利用する都民の方々とのふれあいの場をつくり、交流を図ることを目的としています。

平成10年11月にオープンして以来、既に30万人を超える入館者があり、水道水源地のＰＲ及び奥多摩町の観光の拠点として、子供から高齢者まで幅広い方々に喜ばれていると共に、学校関係等の水道の学習の場として見学いただいております。

○展示内容紹介（１階）
＊多摩川水源から東京湾河口までのマップ
＊水源情報提供＊ダム全景を100㌅画面映像
＊奥多摩町郷土資料展示＊水源地四季画面映像
＊魚・虫・鳥の視点から見る特殊映像
＊水源林とダムの仕組み役割を特殊上映
（２階）＊鶴の湯温泉等写真展示
＊200㌅３Ｄシアターで奥多摩の自然観賞
＊ボールと画面で水道学習＊パソコンでＱ＆Ａ
＊特産品展示パノラマショップ
＊食事休憩パノラマレストラン

ーミュージアム多摩　No.21 ー

発行：東京都三多摩公立博物館協議会
会長　清瀬市郷土博物館館長　瑞山明治
〒204－0013 東京都清瀬市上清戸2－6－41
電話 0424－93－8585

編集委員：あきる野市立五日市郷土館
清瀬市郷土博物館
羽村市郷土博物館
武蔵村山市立歴史民俗資料館

R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています